

地域の期待に自覚を持って応えるために

クラブ員代表者会議 四国ブロック連盟 徳島県立池田高等学校三好校

環境資源科 2年 大西 雄也

環境資源科 2年 前田 聖人

環境資源科 2年 中山 大駕

1 はじめに

(1) 四国ブロック連盟の概要

四国連盟は、愛媛県（13校 1881名）高知県（6校 1264名）香川県（5校 1005名）徳島県（6校 740名）で構成される、計30校 4890名のブロックです。

(2) 徳島県連盟の概要

徳島県連盟は城西高校、城西高校神山分校、小松島西高校勝浦校、那賀高校、吉野川高校、池田高校三好校の計6校で構成されています。城西高校では伝統工芸の藍染で国際交流を推進し、平成28年に新設された那賀高校森林クリエイト科ではドローンを活用したスマート林業を行うなど、各校とも地域に根差した活動に積極的に取り組んでいます。

(3) 徳島県西部の農林業の特徴

本校への通学圏である県西部地域（三好市、美馬市、東みよし町、つるぎ町）は「にし阿波」と呼ばれ、北側に讃岐山脈、南側に西日本第2の高峰を擁する剣山系がそびえ、中央部を四国三郎「吉野川」が西から東へ流れる自然豊かなところなのです。

地域の85%が森林であり、林業をはじめ、昼夜の寒暖差が大きい山の気候を生かしたシンビジウムなどのランや、夏秋イチゴの栽培が特徴的です。また今年の3月には、山の急傾斜地を独自の農法で段々畑ではなく斜面のまま耕作する「にし阿波の傾斜地農耕システム」が世界農業遺産に認定されました。



池田高校三好校の位置



池田高校三好校の正面

(4) 池田高校三好校の概要

本校は、徳島県西部の農林業振興の期待を受け、吉野川上流の池田町に昭和21年、三好郡町村学校組合立徳島県三好農林学校として設立されました。平成8年には商業科が加わり三好高等学校と改称され、農業科と商業科を併設した専門高校となりました。そして昨年、県西部3高校の再編統合が行われ、本校は、食農科学科と環境資源科からなる農林業教育を中心とした池田高等学校三好校となりました。現在、全校生徒は102名です（食農科学科59名、環境資源科43名）。

創立から今年で72年。農林業の担い手を中心として地域を支える人材を多く輩出してきた本校は、現在でも生徒の9割以上が地元からの入学で、先輩方の多くは卒業後も地域

に残り各方面で活躍しています。それだけに、地域からの注目と期待はとても大きいと感じています。

2 地域と連携した取組の紹介

本校は県西部で唯一の農業高校として「地域に根ざし地域とともに歩む農業高校」をコンセプトに、地域連携を基本とした学習を行っています。2年次には「地域貢献」という学校設定科目があり、年間35時間は何らかの地域貢献活動を全員が行っています。

私たちは、分科会テーマである地域からの期待に「自覚をもって応える」ためには、地域貢献活動がカギになると考えています。入学当初は、地域から何を期待されていて、それに対して自分たちが何をできるのか、ほとんど分かっていません。しかし「総合実習」や「課題研究」「地域貢献」の科目による企業・地域とのつながりを通して、少しずつ自覚を高めることができます。

本校は2年次から、各生徒の希望に応じて専攻に分かれて学習を行います。食農科学科は食品製造・果樹・野菜・畜産、環境資源科は森林と草花の計6専攻で、それぞれが専門性を生かして地域と連携した取組を行っています。その中から、一部を紹介します。

■ホンシメジの栽培と普及活動

森林専攻では、キノコの人工培養（増殖）を積極的に行っています。特に「香りマツタケ、味シメジ」と言われるホンシメジについては、平成19年に全国の高校で初めて人工培養に成功しました。その後も技術確立に向けて取り組み、現在は発生率ほぼ100%に達しました。菌床のコストダウンや販路拡大など課題はありますが、この技術を地元の生産者に伝えて、地域の特産品にすることを目指しています。

今年度は地域貢献活動として、生産者さんが試験栽培の菌床に使用するオオムギの収穫を手伝いに行きました。

■ハラル肉を使った食品開発

イスラム教ではイスラムの教えに則った方法でと畜・加工処理された肉（ハラル肉）だけが食べられることを許されています。

食品専攻では昨年より、地元企業と連携してハラル肉を使った食品開発に取り組んでいます。これは、パキスタンからきた本校クラブ員がきっかけでした。食品専攻班では、元々スモークチキンなどの食肉製品をつくっていましたが、イスラム教徒のクラブ員はその試食ができないのです。また、三好地域は外国人観光客が増えており、イスラム教徒に対応したハラル肉は地域全体のニーズでもあります。こうした背景の下で、そのクラブ員が中心となって、誰でも安心して食べてもらえるおいしいハラル肉製品を開発中です。

■純米酒「大地の夢」の醸造

三好市は、かつて10蔵以上の造り酒屋があり、「四国の灘」と称されるほどの酒所でした。

この地域に所在する本校の食品専攻は、地元酒造会社と連携し、清酒の醸造に関する知識と技術の習得に加え商品開発



「大地の夢」のラベル張り

にも携わり、平成 20 年からオリジナルの純米酒「大地の夢」を醸造し、高い評価を得ています。この 10 年で、本校から酒造会社に就職した卒業生が 3 名、酒造関連会社が 1 名います。今後も、地域産業である酒造の担い手の輩出を目指してまいります。

■ホンモロコの養殖と普及活動

ホンモロコとはコイ科の琵琶湖の固有種で、関西では高級魚として珍重されています。骨は非常に柔らかく肉に甘みがあり、高値で取引されているものの、近年はブラックバスなどの外来種の影響で収穫が激減し、各地で養殖が試みられています。

本校では、平成 22 年度より地域の特産物の開発と、三好地域でも増加している休耕地の有効利用策として養殖に関する試験研究を開始し、平成 25 年度にホンモロコ飼育の普及活動を行った結果、5 戸の農家での養殖が始まりました。

今後は、養殖技術の習得・改善や普及活動を継続し、休耕地の有効利用と地域環境の保全に繋がります。



ホンモロコ養殖の流れ

■黒沢湿原のサギソウの増殖・保護活動

科目「植物バイオテクノロジー」で学んだ技術を生かし、三好市内の黒沢湿原に自生しているサギソウ（環境省レッドリストの準絶滅危惧（NT）に指定）を増殖し、環境保護ボランティア団体や地域の中学生と連携して自生地へ定植しています。今後は、自生地の環境を維持するとともに培養技術の確立を目指し、一層の環境保全活動を推進してまいります。



サギソウの培養と定植

■薬用植物の栽培と普及活動

かつて三好地域は有数の葉たばこ産地でしたが需要の変化で栽培されなくなり、休耕地が増えて有効利用策が必要となっています。この休耕地で漢方薬などに利用する薬用植物を育てて産地化することを目指して、現在、地域に合った種類を選抜するための試験栽培を行っています。また、薬用植物の選抜後、産官学連携で商品開発に取り組み、地域の活性化につなげる計画です。

■夏秋イチゴを用いたイチゴワイン醸造

三好地域は山地の涼しい気候を利用した夏秋イチゴの西日本一の産地です。しかし、ほ場の標高が高くアクセスが悪い等の理由で、後継者不足が深刻になっています。そこで本校では、産地活性化のため、廃棄されることが多い規格外や過熟、奇形のイチゴを利用したイチゴワインの製造を産官学が連携して行い、今年の 3 月から販売を始めました。今後、三好地域の特産品として長く愛されるように研究と宣伝を継続してまいります。



三好校のイチゴワイン「高原の煌」

■校内の販売所や地域イベントでの販売実習

学校で生産した農産加工品を校内の販売所「まごころ市」や地域のイベントで、クラブ員が直接販売しています。自分たちが作っているものに対して「おいしかったよ」と直接評価をもらえるので、よい刺激になります。

■公共施設等での地域貢献活動

栽培技術や食品加工技術など、学習で習得した技術や農場生産物を活用した地域貢献活動に取り組んでいます。

- 幼稚園での庭園管理
- JR 池田駅の花壇の手入れ
- 開放講座で果樹の剪定など
- JR 池田駅での門松の制作・設置
- 耕作放棄地を再生利用したソバ栽培

■幼稚園・小学校・中学校との交流学习

異校種との交流学习では、クラブ員が先生となり、「クリ拾い」「ジャガイモ収穫体験」「羊の毛刈り」などを行っています。毎年の恒例行事となっており、楽しみに待っています。クラブ員にとっても日ごろの学習の成果を発揮するよい機会です。

3 まとめ

これまでに紹介してきたような地域貢献活動で、得られたことをまとめてみます。

- ① クラブ員が地域に出ていくことで、地域住民に農業高校の取組を知ってもらうことができ、農業高校への注目や期待が高まる。
- ② 地域産業をはじめ、地域の人材・環境・文化など様々な教育資源に触れることで、地域への理解と愛着が深まる。地域への愛着がわくことで、地域貢献が他人事ではなく自分事になっていく。
- ③ 地域の企業や産業への理解が深まり、卒業後は就職を目指すクラブ員自身の職業意識が高まる。
- ④ 販売実習等で外部の人と直接コミュニケーションをとれるので、農業高校への期待を肌で感じることができ、意欲向上につながる。

以上のように地域貢献活動によって、地域と単位クラブがお互いに活性化するよい関係が築けています。

4 今後の課題

課題は、これらの地域貢献活動は有志を募ってではなく授業の一環で行っているため、個々のクラブ員により取組への温度差があるということです。クラブ員が積極性をもって参加するには、地域貢献活動が他人事ではなく自分事として感じられるようにすることが必要だと考えます。つまり、活動に対して当事者意識と責任感をもつということです。

そのために必要なことを考えてみると、「自分が期待されているという実感」「自分なら力になれるという自信」だと思います。今後は、活動の中で役割分担をしたり、普段の授業で活動内容に関連した知識や技術をしっかり身に付けたりするなど、主体的に課題解決に向けて取り組んでいきたいと思います。